兵庫県立こども病院
看護師
前　安優美さん（兵庫医療大学2017年卒）
AYUMI MAE

PROFILE

兵庫医療大学在学中から小児看護に興味を持つ。卒業後は兵庫県立こども病院にて看護師として勤務。現在は手術室担当として、術前の患者さんのプレパレーションや術後のケアなど、手術に臨む子どもたちの心理的サポートを一貫して行っている。また、手術中のバイタルサインのチェックなども担当している。

一人ひとりとしっかりと向き合う子ども看護のプロフェッショナル

子どもの頑張る力を引き出す医療者に

兵庫県立こども病院にて看護師として勤務する前さん。小児看護に興味を持ったのは、小さいころに通った小児科の先生の影響があった。「幼少期は病院や注射が怖かったんです。でも、先生が頑張ったご褒美にカードやシールをくれたりして、それを楽しみに治療を乗り越えられました」。そんな先生の工夫や心遣いが記憶に残っていて、小児科を専攻することにした。

実習で血友病をもつ子どもを担当したことも、彼女の小児科への思いを後押しした。「看護師とか医療従事者の声かけでは『注射は絶対いや！』と言うような子だったのですが、お兄ちゃんが『頑張れ！』と言っただけで、無言で腕を出して、必死で頑張ってくれたんです」。この経験から、小児医療における家族の力の大きさを実感すると同時に、自分も家族と同じくらい子どもの頑張る力を引き出せるような看護師になりたいという思いが強くなったという。

子どもを一人の人間として尊重する

兵庫県立こども病院は、周産期・小児医療を専門とする、いわば子どもの医療のプロフェッショナル集団ともいえるような病院。非常に専門性が高いことに加えて、前さんの在学当時は兵庫医療大学の実習先にはなっていなかったが、なぜ最終的に同病院を志望したのだろうか。

「小児科の先生が『近くにすごくいい病院があるよ』と教えてくれたのがきっかけですね。子どもに対するかかわり方がとても丁寧で、小児科の看護師をめざすならとおすすめしてくれました」。実際にインターンシップにも参加し、現場の看護師が子どもたちを一人の人間として尊重しながらかかわる様子を見て、同病院で働きたいと強く思うようになった。

現在は手術室担当として、主に術前後の子どもたちのケアなどを担当している。特に手術に臨む子どものプレパレーションは、非常に根気のいる業務だ。これからどんな手術をするのか、どんな器具を使うのかなどをあらかじめ説明し、心の準備をしてもらうというものだが、やはり怖がってしまう子どもたちは少なくない。そこで何が怖いのか、どうすれば怖くなくなるのかを丁寧にヒアリングし、解決したうえで手術に臨む。例えば、「たくさんの人に囲まれるのが怖い」という子どもがいれば、麻酔で眠るまでの間に付き添う医療者の人数を調整することすらあるそうだ。

また、手術中にも子どもの様子に常に気を配っている。手術中は全身麻酔をかけることが多いが、子どもが眠る前は表情などを見ながら、眠ってからはバイタルサインを注意深く観察する。「全身麻酔中は、子どもたちは声も出せませんから、心拍数や血圧などを見ながら『声なき声』をしっかりと拾い上げるようにしています」。もし異常があれば、医師に手術を一旦止めるように要請することもある。自分がしっかりと責任を持ち、恐れずに意見を言う姿勢は、在学中に学んだチーム医療の経験で身についた。

小児看護をめざす後輩たちに伝えたいこと

子どもたちの気持ちに寄り添うことはもちろん、家族への対応など多角的なアプローチが求められる小児科だが、もしこの分野をめざす後輩がいたら、どんなメッセージを送りたいかを聞いた。「人気の部署だとは思いますが、子どもたちはかわいいだけの存在ではなく、小児科ならではの難しさも多いです。それを乗り越えてでも実現したいやりがいを見つけられるかどうかが大事ですね」。そのやりがいを、彼女はすでに見つけている。子どもたちの成長する姿を糧に、これからもこの道を進んでいく。

MY HISTORY

私と医療大

大学時代の一番の思い出は、看護学部の仲間と出会えたこと。実習で辛かったときに、お互いに支え合える存在であったことは心強かったです。私の全てを受け止めてくれる友人とは、今でも仲良くしています。

卒業前に大学シンボルの噴水前で

HYO-i LAB
研 究 紹 介

新型コロナウイルス感染症、がん、リウマチに対する臨床検査医学からのアプローチとは

兵庫医科大学　臨床検査医学講座
主任教授　小柴（こしば） 賢洋（まさひろ）

臨床検査医学とは、臨床で得られるデータをもとに、新しい検査方法や機器を開発したり、病気の成り立ちを調べたりすること。臨床検査医学を専門とする小柴教授は、新型コロナウイルス感染症、リウマチ、がんという私たちにとって身近であり重大な課題に取り組んでいる。

サーモグラフィでは温度ではなく分布をみる

新型コロナウイルスの流行により、街中の商業施設で多く見かけるようになった体表温度の測定機器。ピッと額を測って「あ、平熱だ」と思っている人も多いかもしれないが、そこには誤解がある。「額の温度はあまり体温と相関性がありません。また、よく体表温度を体温として解釈している一般の方が多いですが、それらは異なります」。体表温度はあくまで皮膚の温度で、大切なのはあくまで体表温度からいかに体温を推測できるかだという。

サーモグラフィの機器自体は、昔から存在しているもので珍しいものではない。その研究に小柴教授が新規性をもたらしたのは、「体表温度の分布」を解析するということだ。「疾患ごとに、身体のどの部位が熱くなるのか特徴があります。それを利用することで、発熱だけではなく、感染症による発熱であることを推測できるようになります」。例えば、Aという感染症にかかると、鼻の温度が高くなりやすいといった具合だ。こうした体表温度の分布を解析する装置を、現在企業とタッグを組んで開発している最中だ。

この装置を用いれば、新型コロナウイルス感染症もいずれ識別できるようになるのだろうか。「AI（人工知能）を使ってそれを試みていますが、そのためにはたくさんの患者のデータが必要になるのが課題です。ただ、データを蓄積していけば、新型コロナ特有の体表温度のパターンは見つかるかもしれません」。将来的には、同装置のハンディ化をめざす。だれでも簡単に使えるものにすれば、百貨店など大きな施設だけではなくて、開業医や個人商店などでも導入できるため、社会的な意義も高いと語る。

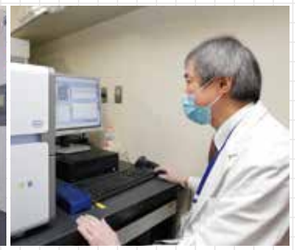
新型コロナの重症化を推測できる?

小柴教授は、新型コロナに関してもうひとつ研究をおこなっている。それがバイオマーカーの探索だ。小柴教授が目をつけた新型コロナウイルスのバイオマーカーは何であろうか。「医学誌の査読を受けている最中なので」ということで具体名はあげられないが、血栓に関する指標だそうだ。新型コロナウイルスは、血の固まりができやすく、その結果肺血栓などを併発し死に至ってしまうケースはよく知られている。そこに注目し、新型コロナウイルスで亡くなった方とそうでない方を検査したところ、患者データの数が限られているにもかかわらず、血栓に関係する物質について明確な差異がみられたという。新型コロナウイルス研究において大きな一歩といえるだろう。

アデノシンのさまざまな可能性

臨床検査の一つとしてサーモグラフィなどの研究を進めてきた小柴教授だが、これまでの主要な研究テーマは「アデノシンを介した炎症・免疫の制御」だ。アデノシンとは、抗リウマチ薬の第一選択薬であるメトトレキサートの鍵となる物質。アデノシンがどの細胞にどう作用することで抗リウマチ効果が出るのかを研究してきた。「メトトレキサートはリウマチによく効くのですが、関節リウマチの関節破壊を完全には抑制できません。一方で、生物学的製剤やJAK阻害薬はとても高価。だから手頃なメトトレキサートを効果的に用いることで、治療効果をさらに高めるのが目標です」。

小柴教授はアデノシンを、リウマチだけでなくがんにも応用できないかとも考えている。「固形腫瘍（がん）は酸欠状態になるのでアデノシンの濃度が増えるのですが、そのアデノシンは、キラーT細胞に対して抑制的に働いてしまうのです」。このアデノシンを制御できれば、キラーT細胞を邪魔せず最大限に作用させることができるのではないか。「がんは、早く見つけて切除するのが基本。でも、高齢の人は心肺機能の低下から手術ができないこともあります」。消化器がんなどは腫瘍が小さければ内視鏡でとれるが、大きいとそれも難しくなる。その際に、アデノシン分解酵素などを局所投与し腫瘍を縮小させることができれば患者の負担にならずに済み、縮小後に内視鏡で切除できるだろう。「どれだけ臨床に根ざしたテーマを研究ができるか。それを忘れずにいたい」。小柴教授はこれからもあくまで患者第一で研究を進めていく。



臨床検査室部では生化学的検査、免疫・血清学的検査、血液学的検査、一般検査、微生物学的検査、生理機能検査および採血まで幅広い検査業務を行っている。検体採取から結果報告にいたる全検査プロセスの品質管理を徹底しており、安心・安全で高品質・高精度の検査を実現している。

URAからひと言！

医療現場において、適切な治療を行うためには、正しく検査・診断することが必要である。小柴主任教授は、新型コロナに係る研究として、"原理・エビデンス"を基にした「画期的なサーモグラフィの開発」と重症化に関連する「バイオマーカー探索」の2つの研究を進めている。今後、これらの研究が発展し、新型コロナをはじめとする感染症の対策に繋がることが期待されます。**【太田 英樹URAより】**

URA（University Research Administrator）とは、研究者とともに研究活動の企画やマネジメント等を担い、研究活動の活性化に寄与する職種です。現在、本法人には2名のURAが在籍しています。

兵庫医科大学
創立50周年特別企画

50年のあゆみ

今回の振り返りは

Vol.1 1972年（昭和47年）-1985年（昭和60年）

兵庫医科大学が開学50周年を迎えるにあたり、50年のあゆみを4回にわたって紹介します。
今回は、開学の1972年から1985年までを振り返ります。なお、本内容は過去の広報誌に掲載された情報を元にまとめています。

1972（昭和47年）

4.1

創立者森村茂樹によって兵庫医科大学が開学

1970年、学校法人兵庫医科大学設立準備期成会を設立、同年9月寄付行為の認可申請を行い、1971年11月22日付をもって文部大臣から認可。1972年4月1日をもって兵庫医科大学を開学、新武庫川病院は兵庫医科大学病院に改組された。

1973（昭和48年）

2.18

1973年度入学試験

この年の入学試験は、西宮市立西宮東高等学校で行われた。定員100名に対して北海道から沖縄まで全国から553名の入学志願者が集まった。受験者は491名で、最終的に135名が入学。

9.8

大学病院本館完成

1971年11月の兵庫医科大学設置認可と同時に着工、以来1年10ヶ月かけて、1973年9月8日に大学病院本館が完成。教職員数も1000名を超える。

1975（昭和50年）

10.24

第4回大学祭

第4回大学祭（1975年10月22～28日開催）を実施。24日（3日目）の音楽祭のゲストにはキャンディーズを迎えた。

1977（昭和52年）

4.1

森村奨学会設立と森村賞授与の決定

教育の促進並びに学術研究の進展を助成することを目的に、森村氏およびその縁故者の寄付金等をもって森村奨学会が設立された。これを機に、1977年度から毎年卒業生2名に森村賞を授与することが決定した。

1978（昭和53年）

3.24

大学院設置認可

1978年3月24日付で文科省から大学院設置認可を受ける。募集人数は60名。

3.25

開学以来初の卒業式

第1回卒業式が開催される。77名の卒業生が参加。

1979（昭和54年）

11.24

森村氏に正5位勲3等瑞宝章が贈られる

森村氏の逝去に伴い、生前の医療、教育、交易に尽瘁された功により特旨をもって正5位勲3等瑞宝章が贈られた。

1980（昭和55年）

3.26

救急救命センター竣工

救急救命センターの竣工披露パーティーが行われる。パーティーに先立ち、各報道機関に向けてセンター内部の機器等の展示、説明を実施。

1981（昭和56年）

4.9

入学宣誓書に一人ずつ署名することに

1981年度入学式から、学長の式辞のあと、入学者は一人ずつ入学宣誓書に署名することになった。

9.7

総合グラウンドと醫聖祭の名称が決定

現在も使用されている鳴尾浜の総合グラウンドの名称が「兵庫医科大学総合グラウンド」に決定。
また、第10回兵庫医科大学大学祭から、大学祭の名称が「醫聖祭」に決定。大学祭の名称は一般公募で「医聖ヒポクラテス」から名づけられた。（応募作の中には「ABCでEバンツ」、「何となくクラシテル」などの案も）
10月21～26日の間に開催された醫聖祭では、チャゲ&飛鳥、石川優子、杏里のコンサートが開かれた。

1982（昭和57年）

3.15

第5回森村賞で初の女性W受賞

1982年3月15日、第5回卒業式には卒業生78名が参加。森村賞は賞創設以来初めて両名とも女性の受賞に。

3.31

第一回大学院課程修了者と本学初の医学博士が誕生

1982年の3月に第一回の大学院課程修了者を出し、同年3月31日付をもって第1、2、3号の兵庫医科大学医学博士が誕生した。

8.13

大学会館竣工

学生教職員食堂などを備える大学会館が竣工。今も多くの人が利用している。

1984（昭和59年）

3.24

9号館竣工

教職員の増加にも伴い、9号館が竣工。竣工当日は教職員参加のもと竣工披露パーティも実施。

1985（昭和60年）

11.1

特定承認保険医療機関に承認

1985年11月1日付で本学病院が特定承認保険医療機関に承認される。また、実施する高度先進医療として「脳血管内手術」も同日付けで承認された。

Interview
兵医Memory

森村茂樹氏を父にもち、本学の第1期生で第1回森村賞受賞者&初の医学博士

医療法人財団 樹徳会 上ヶ原病院
理事長 大江 与喜子(1978年卒)

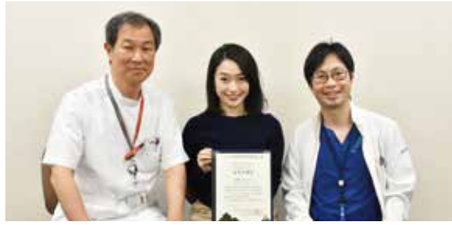
1972年に入学した1期生として50年前を振り返ると、当時は校舎が少なく、グラウンドもなかったことを思い出します。女子生徒も、学年で1割しかいませんでした。先生たちとの距離がとても近かったことも印象的です。若い先生から全国的に著名な先生まで、先生方には毎日夜遅くまで大変親身になって指導していただきました。私の病院へ実習に来る学生たちにもいつも伝えていますが、大学時代に勉強したことがその後の医師生活の土台になっていきます。若い皆さんにも、そのことを意識して勉学に取り組んでほしいと思います。私の学生時代は勉強漬けの日々ではありましたが、週の半分は部活動にも参加し、友人にも恵まれ、とても充実していました。部活動も1期生が作ったんですよ。今も母校愛の強い卒業生が多いと感じます。卒業式で父から森村賞を受け取ったことは、なんだか気恥ずかしい思いでした。

父は、本学のために全身全霊をかけていました。娘には弱い姿を見せませんでしたが、大学開設に至るまでは大変な苦労があったそうです。開設後は世界でも戦える医師、研究者を育てようと日々まい進し、亡くなる直前までドイツの大学と提携を結ぼうと、国際交流にも積極的に取り組んでいました。精神科医でもあった父が最も大切にしていたのは、建学の精神にもある「社会福祉の心」です。今後もこの精神が受け継がれていくことを願います。これから歴史を作っていく皆さんには、「一歩たりとも後退させてはいけない」と伝えたいです。ぜひ100周年をめざしてがんばってください。

STUDENT INFORMATION

課外活動 REPORT

兵庫医科大学 医学部生が日本消化器外科学会総会の優秀演題賞を受賞



(左から)池田主任教授、数井さん、片岡講師

2020年12月15日(火)～17日(木)にかけて和歌山ビッグウエーブおよびオンラインで開催された「第75回日本消化器外科学会総会」にて、本学 医学部6年次(当時)の数井 えりささんが「医学生・メディカルスタッフ・初期研修医セッション」でスライド発表し、「優秀演題賞」を受賞しました。

数井さんは、下部消化管外科の片岡講師の勧めで、5年次の臨床実習(ポリクリ)にて執刀補助として立ち会った手術の症例を学会にて発表。幼少期にオーストラリアの現地学校に数年通った経験と、医師を志す前に上智大学 英米学科在学中に学修した経験を踏まえ、自ら英語でスライド発表することを選択しました。

受賞演題名
A case of curative extended surgery for recurrent retroperitoneum mesothelioma

授与団体
一般社団法人 日本消化器外科学会

兵庫医療大学 薬学部生が「令和2年度放射線教材コンテスト最優秀賞」を受賞

受賞した学生たち

2020年12月27日、日本科学技術振興財団が主催する令和2年度放射線教材コンテストにて薬学部 5年次(当時)の嶋津 佑弥さんが最優秀賞を受賞し、オンライン授賞式で表彰されました。

嶋津さんはコンテストにて共同研究者の教員や在学生とともに、放射線管理が不要な天然核種の放射線計測から放射線の特性が理解できる教育プログラムを考案。また、兵庫医療大学における放射線教育への取り組みについて紹介しました。

研究テーマ
市販試薬の放射線計測による新規放射線教育プログラムについて

共同研究者
嶋津 佑弥(薬学部 5年)、佐々木 豊(薬学部 5年)、味谷 遼(薬学部 5年)、小松 理佳子(薬学部 6年)、藤野 秀樹(薬学部准教授)
※学年はすべて当時

兵庫医療大学 理学療法学科生の論文が国際科学雑誌に掲載

研究室で執筆に取り組む学生たち

2021年3月12日、理学療法学科 永井宏達講師の研究室に所属する沖中 優斗さん、奥田 和希さん、小松 良さん(いずれも当時4年次生)と兵庫医科大学 内科学総合診療科(新村 健主任教授)、歯科口腔外科学(岸本 裕充主任教授)、整形外科学、兵庫医科大学ささやま医療センター、新潟大学 歯科(長谷川 陽子講師)との共同研究が、「International Journal of Environmental Research and Public Health」に掲載されました。

高齢期において近年問題視されている身体フレイルと、口腔の脆弱性を反映するオーラルフレイルの関連性を詳細に調査した研究で、オーラルフレイルは、身体フレイルの一要素である歩行速度の低下と密接に関連していることが明らかになりました。

歩行速度は理学療法を行ううえで重要な指標の一つですが、臨床では口腔機能も合わせて評価する必要があることを示唆しています。

掲載雑誌
International Journal of Environmental Research and Public Health

論文タイトル
Association between Physical Frailty Subdomains and Oral Frailty in Community-Dwelling Older Adults

法人からのお知らせ

人事情報 主任教授・教授の就任挨拶をご紹介します

兵庫医科大学 薬理学
北岡 志保 主任教授 (2021年4月1日就任)

この度、薬理学講座の主任教授を拝命いたしました。

私は1999年に大阪大学工学部を卒業し、工学研究科の修士課程を修了しました。医学研究に関心を持ち、大阪大学医学研究科の博士課程に進学、国立循環器病センター研究所薬理部、京都大学医学部神経・細胞薬理学で長年薬理学研究に従事しました。その後、神戸大学医学部薬理学分野の助教・講師として薬理学の講義を担当して参りました。

医学教育では、薬理学が苦手意識を持たれやすい科目であるため、分かりやすい講義を心掛けます。また、医学研究は医学の発展に必要不可欠であり、研究に興味のある学生を研究室に受け入れ、フィジシャンサイエンティストの育成に繋げたいと考えます。兵庫医科大学の益々の発展のため、精一杯努力する所存です。ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

兵庫医療大学 リハビリテーション学部 作業療法学科
平上 尚吾 教授 (2021年4月1日就任)

この度、リハビリテーション学部作業療法学科の教授を拝命いたしました。

私は2003年に吉備国際大学を卒業し、岡山県の病院で臨床に従事しました。学位取得後、2013年に当学科の身体障害領域の講師として着任し、学生教育を行って参りました。臨床や研究では、とくに脳卒中後の生活行為や上肢麻痺に対する作業療法を専門にしております。

作業療法士はさまざまな作業活動を用いて対象者の心身機能や生活の回復を支援します。対象者の生活に関わり、作業活動という特殊な支援手段を持つ作業療法の意義や奥深さを、臨床経験や研究内容を融合させながら学生に教授し、今後とも人々の幸せに貢献できる作業療法士育成に力を注いでいく所存です。今後とも引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

兵庫医療大学 看護学部 基盤看護学領域
鈴木 みゆき 教授 (2021年4月1日就任)

この度、看護学部 基盤看護学領域の教授を拝命いたしました。

私は、病院での勤務、大学院での学修の後、2008年1月1日付で本学に採用され、以降は基盤看護学教育および看護技術に関する研究に従事して参りました。

本学卒業生が療養者一人ひとりに適した看護を実践するとともに、山積した課題を解決できる人材となれるためにも、主体的に考え行動する力、生涯学習していく力が重要であり、それらの育成を大切にしたいと考えております。また、看護学の発展やより良き看護実践の追求のためにも、看護技術に関する研究を継続的に取り組むとともに、看護師・教育者としてできる学生とともに行う地域貢献活動にも尽力していく所存でございます。今後ともご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

兵庫医療大学 看護学部 家族支援看護学領域
石原 あや 教授 (2021年4月1日就任)

このたび、家族支援看護学領域 小児看護学教授を拝命いたしました。私は、兵庫医療大学の開学2年目に着任し、熱意あふれる教職員、学生のみなさまとともに、医療大学の歴史づくりに関わらせていただきました。先日11期生が巣立ちましたが、卒業生が兵庫医科大学病院をはじめさまざまな現場で活躍する姿をとても誇らしく感じています。

専門の小児看護の分野では、急速な少子化が進む中、慢性疾患や高度な医療的ケアを必要とする子どもの増加、子育てに困難を抱える家族など多くの課題があり、看護職に求められる役割も多様化、複雑化しています。次世代を担う子ども達や家族が、将来に希望を持って健やかに成長することに少しでも寄与できるような看護職のあり方を探求しながら、教育・研究に取り組んでいく所存です。ご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

兵庫医療大学 看護学部 家族支援看護学領域
田村 康子 教授 (2021年4月1日就任)

この度、看護学部　家族支援看護学領域の母性看護学・助産学分野の教授を拝命しました。神戸大学医学部附属病院で助産師として従事した後、兵庫県立看護大学修士課程を経て、以後、教育や研究に携わっています。また、国際協力機構(JICA)技術協力プロジェクトでモロッコ地方村落部の妊産婦ケア改善の長期専門家の任務を契機に、現地の助産師を対象に産痛緩和ケア習得支援を兵庫県立大学看護学研究科博士課程で取り組み、現在も継続しています。阪神淡路大震災を経験し、災害の備えも研究テーマです。兵庫医療大学ではこれまでの経験をさらに教育や研究に活かし、地域貢献したいと思います。助産を学ぶ過程は大変ですが喜びも大きく、助産師の育成に尽力したいと思います。今後ともご指導の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

兵庫医療大学 看護学部 生活支援看護学領域
廣金 和枝 教授 (2021年4月1日就任)

このたび、看護学部 生活支援看護学領域 公衆衛生看護学の教授を拝命いたしました。

コロナ禍において一躍脚光を浴びた公衆衛生看護を担う保健師の養成に携わっております。公衆衛生看護は、その名のとおり、公衆(みんな)の生(生命)を衛る(まもる)看護です。その支援対象は、さまざまな価値観をもって生活を営む個人のほか、集団、地域であり、その支援の場は、居住地域、働く場、学校等、多岐にわたっています。支援対象の持つ力を正しく見極め、支援の場に応じた看護を展開しながら創造的にケアシステムを構築し、対象の生活と健康を衛ることのできる専門職を育成していきたいと思っております。

海風を感じる風光明媚な新しい環境で、教育・研究に全力を尽くしていく所存です。今後とも、ご指導の程、宜しくお願い申し上げます。

評議員の異動の異動 次の通り評議員の異動の異動がありました

新任 (4月1日)	兵庫医療大学　教授	川口 浩太郎	辞任 (3月31日)	兵庫医療大学　教授・副学長	山﨑 せつ子
			辞任 (3月31日)	宝塚市　病院事業管理者	明石 章則

監事の異動 次の通り監事の異動がありました

新任 (4月1日)	公認会計士	後藤 研了	辞任 (3月31日)	公認会計士	中西 清

法人からのお知らせ

◇学校法人兵庫医科大学基金 兵医・萌えの会 状況報告

みなさまからのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

2009年7月1日～2021年3月31日

区分	受配者指定寄付金		特定公益増進法人		合計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額
申込	429	91,705,000円	3,406	210,795,498円	3,835	302,500,498円
入金	429	91,705,000円	3,406	210,795,498円	3,835	302,500,498円

寄付申込者ご芳名・法人名一覧(50音順)

2020年12月1日～2021年3月31日

企業等法人（8法人）

●ご芳名・金額記載（2法人）

株式会社オーエンス 様　500,000円
株式会社ポラリス 様　50,000円

●ご芳名のみ（4法人）

株式会社共英メソナ 様
武庫川医療サービス株式会社 様
株式会社日経サービス 様
八洲薬品株式会社 様
（匿名2法人）

役員・教職員等（2名）

●ご芳名のみ　（2名）

阪上 雅史 様
難波 光義 様

緑樹会・後援会・その他個人（182名）

●ご芳名・金額記載（20名）

池元 美幸 様　500,000円
大西 嘉子 様　10,000円
改發 尚三 様　50,000円
改發 陽子 様　10,000円
木村 正 様　10,000円
木村 マキ 様　5,000円
兒玉 善子 様　10,000円
兒玉 喜徳 様　50,000円
柴田 博史 様　50,000円
髙木 実太 様　50,000円
髙木 美由紀 様　50,000円
谷 由佳 様　10,000円
萩森 シャンタル 様　10,000円
檜垣 一恵 様　30,000円
水野 叡子 様　500,000円
毛利 泰子 様　50,000円
森竹 博巳 様　20,000円
森竹 ミツ子 様　50,000円
柳 安奈 様　10,000円
柳 孝代 様　50,000円

●ご芳名のみ（57名）

飯田 久美子 様
井村 敏彦 様
岡谷 文子 様
岡谷 幸一 様
門脇 孝美 様
中澤 久良子 様
木村 千賀子 様
楠田 範子 様
熊谷 裕子 様
熊谷 裕美 様
熊谷 政敏 様
小西 さやか 様
小西 千鶴 様
小西 雅文 様
小西 みゆき 様
小松 輝雄 様
小丸 可奈子 様
佐々木 康晴 様
大黒 幸子 様
大黒 貴 様
髙尾 和良 様
髙尾 素子 様
髙山 ゆみ 様
瀧 秋恵 様
竹ノ上 勲 様
竹ノ上 絵美 様
竹ノ上 春野 様
竹ノ上 真 様
溪村 惠司 様
土橋 昌子 様
土橋 芳邦 様
中澤 豊美 様
中澤 正孝 様
難波 由美子 様
西川 勝秀 様
西川 さとみ 様
西田 正樹 様
二杉 さゆり 様
二杉 義治 様
野﨑 歩 様
馬場 明道 様
福田 仁那 様
福田 晴美 様
福本 幸子 様
藤髙 辰夫 様
藤本 尚子 様
藤本 龍三郎 様
松葉 一惠 様
松葉 多喜夫 様
松本 圭子 様
松本 ふくゑ 様
森田 直子 様
山地 宣子 様
山本 悦也 様
山本 純子 様
湯川 正義 様
湯川 慶子 様
（匿名105名）

詳しい活動報告に関しましては、学校法人兵庫医科大学（兵医・萌えの会）のホームページをご覧ください。https://ssl.hyo-med.org/

◇主な行事予定（5月～7月）※新型コロナウイルス感染症の影響により、各行事が変更となる可能性がございます

5月		
1日	兵庫医科大学	禁煙教育特別講義、ハラスメントに係わる特別講義（1年次）
15日	兵庫医科大学	薬物乱用防止に係わる特別講義
27日	兵庫医療大学	高校教員対象入試説明会（兵庫医療大学 開催）
31日	兵庫医療大学	高校教員対象入試説明会（岡山 開催）
6月		
1日～4日	兵庫医科大学	医学教育分野別評価 実施調査（1日JACME開会式、4日閉会式）
5・6・19・20日	兵庫医療大学	6月オープンキャンパス
28日～7月2日	兵庫医科大学	早期臨床体験実習Ⅰ（1年次）
7月		
未定		
月日未定		
	兵庫医療大学	大学行事実行委員会スポーツ大会　※開催について検討中
	兵庫医療大学	リーダーズキャンプ　※開催について検討中

コロナウイルス対応の現場で

兵庫医科大学病院では、新型コロナウイルス感染症の患者さんと向き合う医療従事者が多数勤務しています。「兵医広報vol252」で特集した記事の"その後の現場"について、救命救急センターの医師3名にインタビューしました。（取材は2021年3月に実施）

救命救急センター　医師　長谷川 佳奈

新型コロナウイルス感染症の診療対応をし始めて、約1年が経とうとしています。

この1年で最も辛かった時期は、2020年12月から2021年1月頃。入院されていたコロナ患者さんのほとんどが人工呼吸器をつけなければいけないほど重症でした。夜、当直を行っている時に患者さんの容体が急変することが多々あり、本当は少し休んで休憩したい時も、「私が不在にしている間に患者さんに何かあったらどうしよう」と気になって休めない日々が続き、体力的にもしんどかったです。目の前で起こっていることへの対処はしなければいけないという使命感で働いていました。

元々はさまざまな救急疾患を見ていた当センターでも、コロナ以降はコロナが診療の中心になっています。本来は大学病院で受け入れるべき他疾患の患者さんも、病床と人的労力の関係で受け入れられないなど、ジレンマがあって辛いです。

しかし、心が洗われる出来事もあります。残念ながらお亡くなりになったコロナ患者さんのご遺族の方から「先生はコロナにかからないでくださいね」とお声がけいただくことが多いのです。ご遺族の方は、会ってのお別れもできなくて相当辛いのに、頭が下がります。

また、重症患者さんが回復し、笑顔や輝いた目を見せてくださった時には、治療して本当によかったなと思います。

コロナの収束が見えない状況はしんどいですが、私にできることを精一杯実施したいです。

救命救急センター　医師　新田 翔

救命救急医として1年目が終わろうとしている時に、コロナウイルス感染症患者さんの診療に関わり始めました。この病気の怖いところは、回復していたのに急変してしまうこと。やるべき治療はやっていたのに、急に患者さんが亡くなってしまった時は、ショックでコロナ病棟に入りたくないとすら思ってしまいました。新型コロナウイルスは、悪化する原因や特効薬がないのが本当に怖いです。

患者さんは隔離病棟に滞在しているため、気を紛らわそうと、明るく元気に接することを心がけています。ご自身の力で回復するケースも少なくないので「一緒に頑張りましょう」と日々お声がけをするほか、患者さんのお顔を見ながら表情を見て、わかりやすく治療についてお話しするように心がけています。

当初は、治療法が明確ではないコロナの治療に携わることや、「家族に移してしまうのでは」と恐怖心や抵抗がありましたが、治療に携わるうちに、少しずつ心に余裕を持てるようになりました。しかし、やはり医師よりも患者さんと接する時間が長い看護師さんがストレスや恐怖心がきっと大きくあると思います。

今もまだ余談を許さない状況が続いていますが、これほどまで多くの重症肺炎症例に接する機会も滅多にないと思うので、取り込んだ知識を体系化して、今後の治療に生かしたいです。亡くなった患者さんのことは頭から離れませんが、少しでも多くの命を救うために、これからも精進し続けます。

救命救急センター　副センター長・医師　白井 邦博

4月中旬現在、当院の新型コロナウイルス感染症対応病床は、疑い病室2室を含めて18床（EICU10床、救急6床、個室2床）あり、主に14名の救急医で診療にあたっています。コロナウイルスが日本で流行し始めた際、感染症指定病院ではない当院は重症患者2床のみの受け入れでしたが、第二波で重症患者が急増したため、受入数を増やしました。ICUがあり、高度な知識を持つメディカルスタッフが揃ってチーム医療ができ、感染症指定医と救急医がいる条件が揃った病院は多くないからです。

私は救急専門医かつ集中治療専門医なので、使命だと感じて第一波から対応しています。恐怖心はないわけではないが、やるしかないんです。また、病棟の看護師さんが本当に頑張ってくれていると思います。ほかのメディカルスタッフも含め、皆命をかけて一生懸命に治療しています。

ここまで大きなパンデミックは初めての経験で、毎日、コロナに関する国内外の論文をチェックし、診療に生かせる情報を入手していますが、患者さんが突然亡くなるケースもあり、心が折れてしまいそうになる現実も。亡くなった際にご家族と対面していただけない異常事態は、側で見ていてとても辛いです。

世間では感染者が減っている時も、重症患者さんは病院に入院されていますし、普段の生活に戻れない方もたくさんいらっしゃる。そのような現実やコロナの危険性を自分ごとと捉えていない方が多いと今でも感じていることが残念です。一人ひとりが意識を持って気をつけないと、この感染症は収束しません。ルールは守って生活することを国民全員で徹底していただきたいですね。

今後は、簡単ではありませんがコロナ治療の標準化をめざすのと、患者搬送を中心とした医療機関内の連携の枠組みを作りたいと考えています。物品の供給が断たれないように保つことも重要です。そして、センターで働くスタッフがもっと安心して働けるようにマネジメントにも気を配らなければいけないと痛感しています。

新型コロナウイルス感染症は、疾患そのものだけでなく、脳出血、不整脈、心不全、肝臓疾患など、予期せぬ合併症を引き起こすのも怖いところ。特効薬がなく、ワクチンの摂取も広く進んでいない現状ではありますが、未知が多いこの疾患に対して、最適な治療を模索し続けたいです。